

はっとりいせき

## 服部遺跡第7次調査 現地公開資料

服部遺跡は、豊中市城山町2丁目、曾根東町5・6丁目、服部本町4・5丁目、服部元町2丁目の南北200m、東西500mにひろがり、猪名川と天竺川に挟まれた沖積地に位置します。

今回の調査は、豊中市立第四中学校校舎改築工事にともない、公益財団法人大阪府文化財センターが豊中市教育委員会より委託をうけて7月から実施しています。

服部遺跡は、弥生時代中期後半から中世にいたる複合遺跡で、これまでに6次にわたる調査が行われています。今回の調査地から西へ100mの体育館の建替え工事に伴い行われた第1次調査（昭和60年調査）では、弥生時代末（今から1800年前）の土坑や、鎌倉時代（今から700年前）の井戸・溝がみつかりました。そして調査地から北東50mの第4次調査（平成6年調査）の際には、弥生時代末の前方後円形周溝墓をはじめとして、竪穴建物・掘立柱建物・井戸・溝などがみつかりました。

今回の調査では、弥生時代中期（今から2100～1900年前）の溝と、弥生時代末から古墳時代前期（今から1800～1700年前）の集落がみつかりました。集落には竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟、井戸2基や多くの土坑・溝がありました。竪穴建物のうち規模が判明した建物は一辺が5.6mの正方形で、面積は31㎡です。中央には煮炊きをするための炉がありました。建物の周囲には幅約1mの溝がめぐらされていました。これは雨水が建物の中に入ってこないようにするためと考えられます。また、土坑からは甕や、壺・鉢・高杯など多くの土器がみつかりました。

今回の調査でみつかった集落は、第4次調査でみつかった集落から南西につづいていると考えられ、集落の広さは14000㎡以上であったことがわかりました。

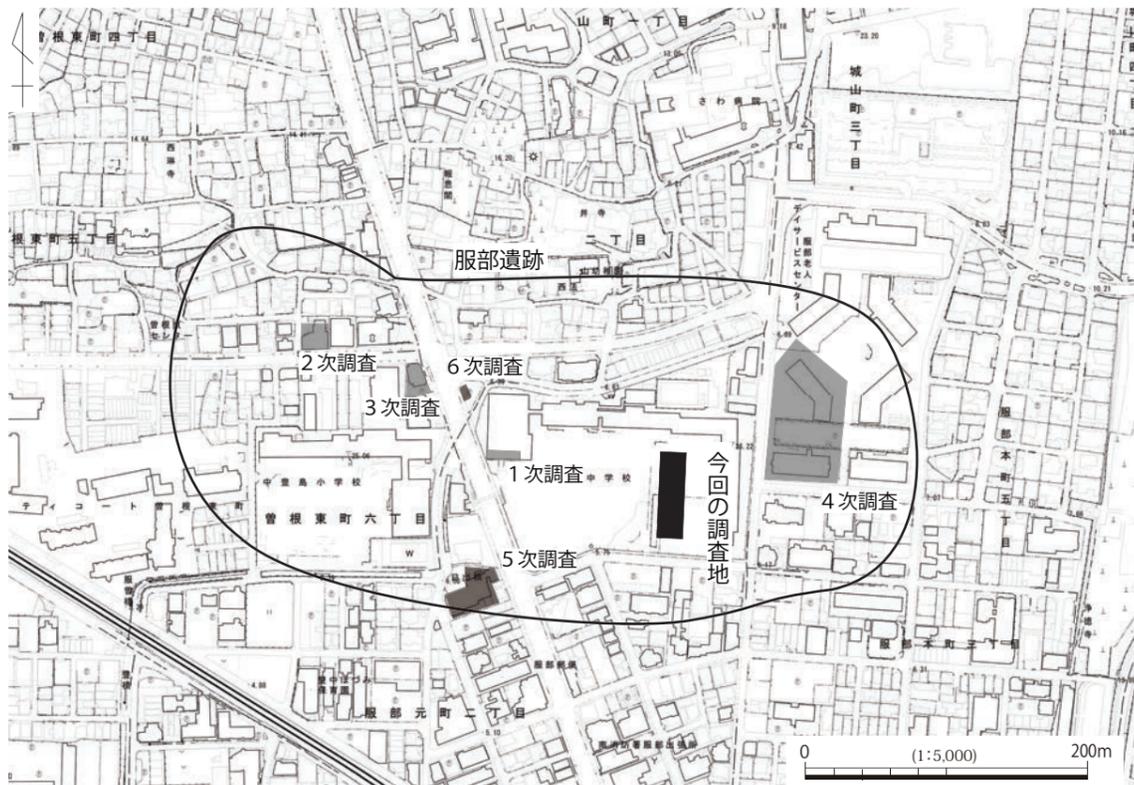


図1 調査地位置図

そして、弥生時代の他に鎌倉時代から室町時代（今から800～700年前）の様相も明らかになりました。調査区の東端には南北方向に流路があったことわかりました。岸には、流路から水を引き込み溜めた水溜や井戸もみつかりました。流路の中からは瓦器椀、羽釜、陶器の甕などがみつかりました。

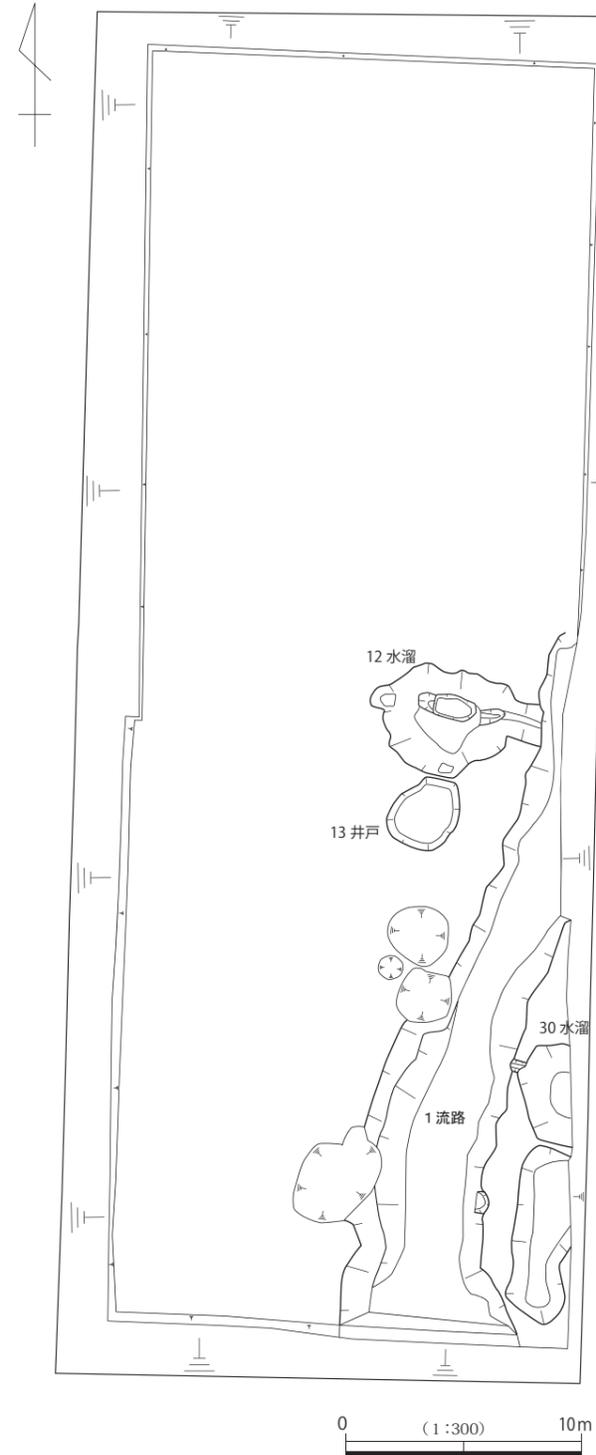


図2 鎌倉時代～室町時代 遺構全体図



写真1 1流路（北から）  
北から南へと流れていました



写真2 1流路 断面（北から）  
流路は川幅を変えながら泥や砂で埋まっていきました

弥生時代末から古墳時代前期のムラ跡



写真3 全景 (南から)

調査区北側に弥生時代末から古墳時代前期の竪穴建物や多くの土坑・溝が密集していました



写真4 18土坑 土器出土状況 (南から)

甕や高杯が土坑に捨てられていました

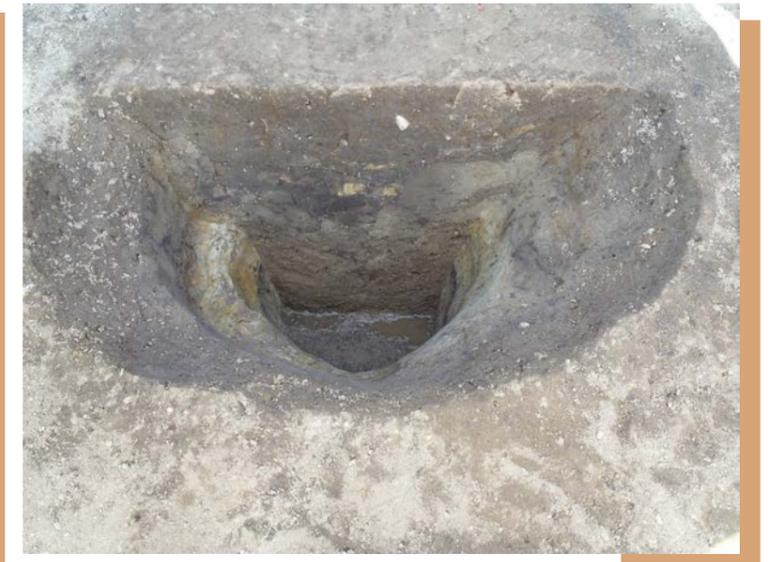


写真5 70井戸 断面 (南から)

井戸の深さは1.5m以上ありました

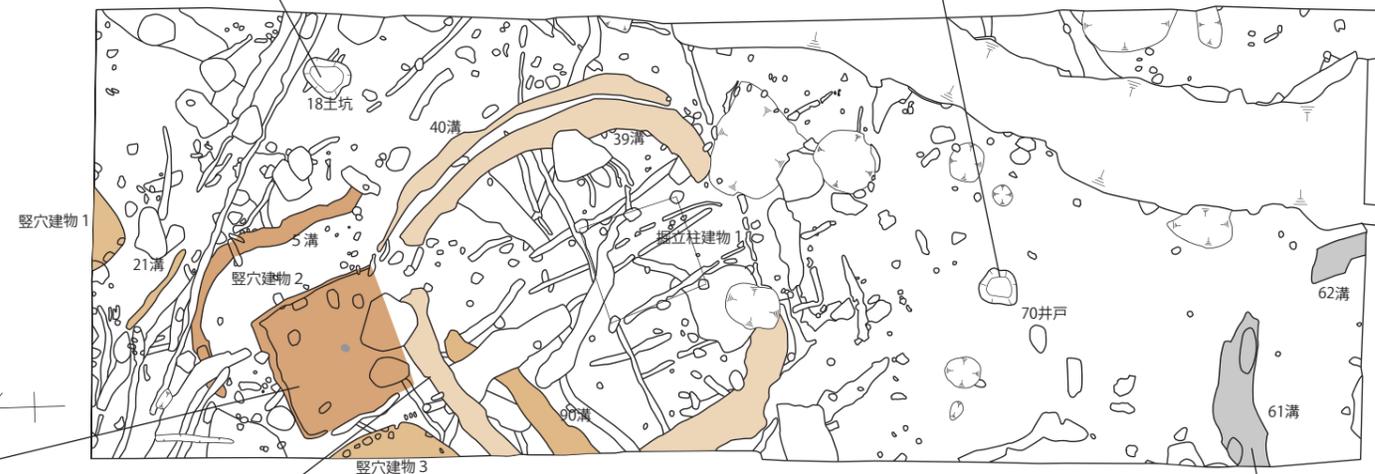


図3 弥生時代中期・弥生時代末～古墳時代前期 遺構全体図

0 (1:300) 10m



写真6 竪穴建物2 全景 (南東から)

建物の壁際に溝を掘り、中央に炉がありました  
建物の周りに溝をめぐるしていました



写真7 39・40溝 全景 (南東から)

掘立柱建物の周囲をめぐる溝



写真8 61・62溝 全景 (東から)

調査区南端から弥生時代中期の溝が見つかりました